
Blood?Moon

MaYuRi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blood? Moon

【Nコード】

N5607Z

【作者名】

MaYuRi

【あらすじ】

異世界ラビンスにある小さな村で暮らす、銀髪の少女・イヴ。真っ赤な夕日が浮かぶ日、イヴは一人の吸血鬼に出会った。

その彼は
異世界の魔王だった。

1話

血のように赤く染まる夕日

イヴはそれを見て、眉をひそめる。

（まるで…誰かが血が流しているみたい）

そんなことを考えながら、イヴは町を歩いていた。すると、通りすがりの男達の話が耳に入る。

『どうやら、この辺りに吸血鬼が出たそうだ』

（吸血鬼…？この近くに…？）

吸血鬼は人の血を糧として生きている。

永久の命を持ち、美しい美貌は目を瞠るほど。

そんな吸血鬼が人のいる町の近くにいてなんて珍しかった。

異世界、ラビンス。

自然が溢れ、多種族が暮らす世界。

ラビンスを支えているのが魔王と呼ばれる魔界の王。

世界の均等は魔王に支えられていた。

イヴは知っていた。

魔界の王は吸血鬼であるということ。

しかし、この町は他の国や街とは隔離されているため、その事実を

知らない。

町民は吸血鬼を消そうと、武器を手に使っていた。

イヴは急いで家に帰り、包帯を手取る。

辺りが闇に染まった夜、イヴは家を飛び出した。

「はぁ…はぁ…」

イヴは森を徘徊する男達に見つからないように木の陰に隠れながら歩いて行く。

暫くすると、月の光に当てられて何かが光っているのが見えた。

恐る恐る覗き込むと、そこには目を瞠るほど綺麗な男の人が眠っていた。

漆黒の髪

整った顔立ち

まるで人形のようなだった。

その美しい顔は血を失っているせいが、白に近かった。

（早く…手当てをしないと…）

そう思い、彼に手を伸ばすと

「…何の用だ」

低い声がイヴの手を制す。

真っ赤な瞳がイヴを捉える。

「美しい…髪だな」

そう言つて男はイヴの長い髪を優しく掴む。

イヴの銀色の髪が月の光に当たり、真っ白に輝く。

「あ…手当てを…」

イヴは戸惑いながらも、男の傷を見つめる。

男は「ああ」と呟くと、肩を竦める。

「こんな傷、すぐに治る」

男はそう言っていたが、見るからに痛そうだった。
血は止まることなく、流れ続ける。

男はそれを見て、ちっと舌打ちをする。

「血が足りないのか。忌々しい」

男はよろけながら立ち上がる。

だがすぐに小石につまずき、倒れそうになる。

イヴは男の体を支えた。

男はイヴの胸に顔を埋める。

そして、ぽつりと呟いた。

「いい香りだ…」

（瞳が…）

男の瞳は真っ赤に染まっていた。
さっき見たよりも赤く…血のようだ。

イヴはぎゅっと下唇を噛み、勇気を振り絞る。
震える声で男に囁くように言った。

「血が必要なら…私の血を…」

「……すまない」

（怖い。でも…）

イヴはぎゅっと目を瞑る。

男の唇がイヴの首筋に触れる。

「…っ！」

次の瞬間、鋭い痛みが体中に流れる。
気を失いそうなほど、鋭い痛み。

イヴの記憶はそこで途絶えてしまった。

2話

目をゆっくり開けると、月の淡い光が降り注ぐ。
窓の外は真っ黒で闇みたいだった。

（此処は…？）

辺りを見渡したが、全く知らない場所。
どうやら、何処かのお城の中のような。

（いつの間に此処へ？）

あれからどのくらい経ったんだろう。
身体はまだだるさが残っている。

そつと首筋に手をかける。

首筋には赤い痕が二つ。

まだ、熱が残っているみたいで熱かった。
血が滲んでいて、痕が痛い。

（私…気を失って…）

此処へ連れて来たのはあの『彼』だろうか。

コンコンツと控えめに扉を叩く音が聞こえる。

扉がゆっくりと開き、血のように真っ赤な髪の女が中に入ってくる。

「お目覚めのようですね」

「あなたは…？」

「御世話をさせていただきます、エリルです。洋服が汚れているよ
うなので、こちらに御着替えください」

真っ赤な瞳が細くなり、笑みを浮かべる。

そう言われて、イヴは服の襟が血で滲んでいることに気がつく。
だが、エリルに渡された洋服を見て、イヴは顔を引きつかせた。

薄く真っ白なワンピースのようなドレスは肌に吸いつくようだった。
ふんわりとしたこういうドレスを着たことがないイヴは少し戸惑っ
ていた。

エリルはイヴのドレス姿を見て、目を細める。

「良くお似合いです」

エリルはイヴの髪を手に乗せる。
櫛で梳かれています、少しイヴはくすぐったかった。

「あの…どうして私は此処に？」

「王が貴方を此処へ。驚きましたわ。傷を負って帰って来たと思え
ば、貴方を抱えているのですもの」

（…王？あの男の人が…？）

自分が血を与えたのは此処の王様だった？

確かにきれいな顔立ちだったとイヴは思った。

高貴な血を持っているものは美しいと誰かが言っていた。
彼は…高貴な血の持ち主だった。

「さて、王がお待ちです。ご案内しますので」

櫛で梳かれた髪はさらさらと風に靡く。

長い髪が流れて、くすぐったい気もした。

お城の長い廊下を歩きながら辺りを見渡す。

まるでそこは西洋のお城のようだった。

気になったのは、光を遮るかのように真っ黒だった。

ろうそくの明かりがゆらゆらと揺れて、幻想的だった。

先を歩いて行くと大きな扉が現れる。

その扉をコンコンツとエリルはノックした。

「イヴさまを連れて参りました」

「…入れ」

エリルはゆっくりと扉を押し、開いた。

「どうぞ」とエリルはニコリとほほ笑み、部屋の中へイヴを招く。

イヴはおずおずとエリルに促されて部屋の中に入る。

すると、キィと音をたてて、扉が閉まった。

（もう…後戻りはできないみたい）

イヴは覚悟を決めるようにふうつと息を吐く。

静かに深呼吸をし、コツコツと慣れないヒールで前へ進んだ。

前へ進むと現れたのは王の玉座。

そこに座っているのは、美しき吸血鬼。

月の光よりも明るい光が彼を照らす。

漆黒の髪はつやつやと輝きを増し、赤い瞳が真っ直ぐイヴを見つめる。

そんな彼に見つめられて、イヴの頬は火照ってきた。

「あの…何故…私を？」

震える声でそう呟くように言った。

目の前の男はふっと口角を上げて、イヴを見る。

「そう怯えなくていい。害そうとは思っていない。我のせいで倒れてしまったようなものだからな」

そう言ってイヴの頬に触れる。

イヴはびくりと怯えてしまい、思わず後退りそうになった。

男は悲しそうにイヴを見る。

イヴは震える声で謝った。

「い、ごめんなさい…」

「そんなに…我が怖いか？」

（怖くないはずなのに。どうして…こんなにも身体が拒否するの？この人は悪い者じゃないはずなのに…）

自分に自答自問しても、答えは得られない。
身体の震えは一向に治まらなかった。

そんなイヴを見て、男はすっと目を細める。
そして次の瞬間、イヴをそっと抱きしめた。

「…えっ？」

一瞬何が起こったのか、イヴには分からなかった。

「…我が怖いなら、逃げれば良い」

「そんなこと…」

（出来るわけ無いよ…）

暫くこうしていると、イヴの震えが止まる。

男はイヴを抱きしめながら、ぼそっと呟く。

「…柔らかいな、お前は」

そのとろけそうな甘い声に、イヴの心臓はドキンツと高鳴る。
どう返していいか分からず、ただ真っ赤になりながら男を見た。

「そして、愛らしい」

「そ、そんなこと…ない…です」

心臓がドクンドクンと大きくなっていくのが、イヴは恥ずかしかった。

この心臓の音に気付かないでと心の中で願った。

そう願っていると、突然身体を離される。

（な、なに…？）

男の瞳がイヴの後ろをじっと見ている。

イヴも後ろに首を動かすと、いつの間にか一人の男が立っていた。

「ユエ様、お楽しみのところ申し訳ございません。そろそろ、お客様がお見えになる時間です」

「もうそんな時間か…」

そう呟き、ちらりとイヴに視線を向ける。

イヴは首を傾げ、二人を不思議そうに見ていた。

「 그레이、イヴのことを頼む」

「承知いたしました」

그레이と呼ばれた男はにつこりとほ微笑み、軽くお辞儀をする。

그레이に促され、イヴは部屋を出た。

部屋を出る瞬間、ユエと呼ばれた彼が悲しそうにほほ笑んだ気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5607z/>

Blood?Moon

2011年12月20日15時46分発行